

ニヤ調査30周年と改革開放40周年

小島康誉

2018年は日中共同ニヤ遺跡学術調査30周年にあたる。「日中平和友好条約40周年」「中国改革開放政策40周年」でもある。ニヤ遺跡調査についてはこれまでも報告書3巻や度々の国際シンポジウムなどで発表してきたが、この機会にニヤ調査の一端を紹介し、日本と中国の大規模共同調査を可能にした「日中平和友好条約」と「改革開放政策」にふれたのがこの小稿である。

ニヤ調査30周年記念「ニヤ・考古・物語—中日ニヤ調査30周年成果展」

2018年9月22日、中国・新疆ウイグル自治区(以下、新疆と略す)の新疆博物館で開幕した。新疆文物局主催、新疆博物館・新疆文物考古研究所主管である。3月、新疆文物局で王衛東局長・李軍副局長・于志勇館長らと打合せたニヤ調査30周年記念活動の一環である。短期間での大規模な展示会準備は大変だったと聞く。要請により佛教大学宗教文化ミュージアム内で保管している隊旗・調査機器・ロゴ入りシャツ・各種資料なども貸し出した。

博物館ロビーでの開幕式には130人ほどが出席。司会は于館長、主な出席者が紹介され、王局長と社会科学院士が挨拶、つづいて筆者が挨拶。1988年開始の調査を思い出しつつ拙い中国



開幕式、正面左演台で挨拶する王局長、正面右が司会の于館長、筆者は一系列目中央(撮影：楊新才氏)

語でニヤ調査協力への感謝と記念展の成功を期待と話した。通じたようで数回拍手いただいた。

記念展タイトルには「中日尼雅(ニヤ)調査…」、英語でも「Sino-Japan…」と日中共同であると明記され、日中共同隊の活動を紹介するコーナーも設けられ、写真や出版物などを多数の参観者が興味深く見ていた。

筆者の国際協力を体験したいと同行した企業経営者らから「中国と取引していたことがある。よくぞここまで」と、取材中のTV局記者からは「外国人と共同展開した調査の記念展が盛大に開かれるのは尋常ではない」と言われた。また居合わせた中国側隊員「共同で発見できた」「協力して保護・研究できた」と喜んでいて。筆者は参観後、同博物館で「日中ニヤ調査を振り返って」をPPT講演した。翌23日の新疆日報(人民日報の新疆版といえる)1面で30周年展が報じられた。以下は記事の拙訳である。

中日ニヤ調査30周年成果展開幕

「五星出東方利中国」錦など300余点貴重文物展示

22日午前、「ニヤ・考古・物語－中日ニヤ調査30周年成果展」が自治区博物館で開幕した。今回の展示は「ニヤ調査 風雨100年」「精絶名勝 オアシス文明」「輝く成果 困難克服」の3部からなり、来年1月まで展示される。

展示品はニヤ遺跡出土の貴重な300余点、例えば「五星出東方利中国」錦肘当・司禾府印・「延年益寿大宜子孫」錦枕・蜡染藍白印花綿布・「元和元年」錦・「王侯合婚千秋万歳宜子孫」錦・ニヤ遺跡1号墓地8号棺夫婦合葬ミイラなどを含み、中国古代新疆ニヤ遺跡文明の奥深い蓄積と大変化を再現している。

ニヤ遺跡はタクラマカン沙漠南縁にある漢晋時代のオアシス集落遺跡である。1988年開始の中日共同ニヤ遺跡調査は新疆文化領域で最初の国外との合作項目である。1991年「中国涉外考古工作管理弁法」発布後、中日共同ニヤ遺跡調査は国務院の批准により中国最初の国際協力考古項目となった。

9月21日、任華新疆政府副主席との会見時に「1月から8月迄で新疆への観光客1億人、年間では1.3億人に達するだろう」と聞いた⁽¹⁾。9月下旬参観したウルムチ国際バザール・トルファン交河故城・クチャキジル千仏洞など至る所に中国人観光客があふれていた。于館長からは「観光ブームで一日1万人来館」と。2019年1月迄の記念展も多くの方が参観し、日中相互理解促進の一助となるであろう。

ニヤ調査30周年成果展は中国の検索サイト「百度」では「新華網」「人民網」など現時点で28万件余報じられている⁽²⁾。そのひとつ我が国の文化庁に相当する「国家文物局」Webには「改革開放40周年と中日共同ニヤ調査30周年を祝うために開幕した」などと報じられ、「亜心網」は「初日は8000人以上が参観した」と報じている⁽³⁾。

ニヤ調査30周年記念『中国新疆36年国際協力実録』

2018年10月30日、筆者は諸氏の協力をえて東方出版より出版した。これも3月に新疆側と合意した記念活動の一部である。情報の早期公開の原則に沿い、これまでも報告書・シンポジウムはじめ『シルクロード・ニヤ遺跡の謎』(東方出版2002)・『新疆での世界的文化遺産保護研究事業と国際協力の意義』(佛教大学宗教文化ミュージアム2013)・『Kizil, Niya, and Dandanoilik』(英文・東方出版2016)などで発信してきたが、その後の後発事項などを加えた活動記録集である。「一带一路」新疆での国際協力実践例でもある。

4月から編集に着手。ニヤ遺跡調査を中心に、そのきっかけといえるキジル千仏洞修復保存協力、ニヤ調査の後継ともいえるダンドンウイリク遺跡調査、そして人材育成事業など関連活動と小論「国際協力の意義」なども含んでいる。よって副題として「キジル ニヤ ダンドンウイリク」を配した。また中国語で「一带一路実践図典 克孜尔 尼雅 丹丹烏里克」、英語で「Silk Road Kizil Niya Dandanoilik」と表紙に記した。大量の写真や資料から選び出した約840点、日本語のほか中国語と英語も併記し、A4版270頁。中訳・英訳は周培彦・高田和行両氏が担当。調査隊員の安藤佳香・浅岡俊夫・田中清美・吉崎伸各氏からはエッセイを寄せていただいた。初公開の写真・資料も多く含んでいる。調査費用や保護協力費を明記した一部の協議書も収録している。いわば調査報告書の副本といえる。

筆者が一民間人として日中諸氏の指導・尽力をえて実践してきた国際協力の全容を時系列で公開しており、国際協力の実践参考文献として長く評価されるものと期待している。

調査隊員・関係諸方面はじめ中国側へも贈呈した。多くの礼状から一通を紹介したい。国家



ニヤ調査1990~92年部分

文物局の宋新潮副局長から「大作を贈呈いただき心から感謝。この『実録』は貴方の長年の活動と貢献の真実の記録であり、解説である。中日両国文化交流と学術活動を生々しく収めていて、非常に意義がある。……私は国家文物局を代表して心からの敬意と感謝を表します。……今年には中日平和友好条約締結40周年であり、安倍晋三首相の訪中時に双方は多くの共同認識を達成し、中日文化交流は新たなチャンスを迎えた。貴方が継続して新疆の発展に関与することを希望する。貴方は本書に『至誠・感謝・縁・義理・人情といった琴線にふれる交流を続けてきた』と書いている。中日の平和友好を共に推進し、共栄へ合作しよう」(拙訳)と温かいEMSをいただいた。氏には1997年佛教大学で開催した国際シンポジウムにも参加いただいた。

ニヤ調査30周年関連：市民講座「シルクロード 美の道 壁画の道」・同写真展

研究者のみならず市民も対象とした、いわば「文化財保存研究啓蒙講座」は安藤佳香佛教大学教授の企画により、「シルクロード 美の道 壁画の道」と題され、佛教大学四条センターで2018年11月から19年3月まで、5回開催される予定である。当年3月、新疆文物局で合意した30周年記念活動の一環である。

11月は筆者が「鉄線描×屈鉄線×文化遺産」をPPT講演。焼損した法隆寺「鉄線描」壁画の源流の実物資料といわれるダンダンウイリク遺跡発掘「屈鉄線」壁画との類似性を紹介し、キジル千仏洞修復保存やニヤ遺跡調査にもふれ、文化財保護の重要性を訴求した。安藤教授は最終回に「描線とエネルギー形象－シルクロードから日本へ」を講演予定である。

なお、12月は安藤教授・筆者・徐永明亀茲研究院長の三者協議書に基づきキジル千仏洞などクチャー帯の石窟を管理・研究している亀茲研究院の徐院長ら3名が発表予定であったが、業務多忙で訪日延期となり、日本人研究者が講演することになった。国際活動の難しさの一例といえよう。安藤教授のキジル・シムセム両石窟壁画研究は本協議書により10月予定通り実施された。

同タイトルの小規模写真パネル展(佛教大学宗教文化ミュージアム・佛教大学内ニヤ遺跡学術研究機構共催)は同センターロビーで12月から19年1月まで開催予定である。

ニヤ調査30周年関連：『ニヤ調査図録編』

後述のように日本側により報告書3巻が刊行済みであるが、中国側編集版は遅れている。当年3月、新疆文物局で合意した30周年記念活動の一環に、中国側編集『ニヤ調査図録編』出版がある。完成が待たれる。

ニヤ遺跡概要

ニヤ(尼雅)遺跡はタクラマカン沙漠南縁・ミンフン(民豊)から約100km北上した一帯に残る前1世紀から5世紀頃まで栄えた古代都市で、『漢書』など記載の西域36国のひとつ「精

絶国」である。規模は東西約 7km・南北約 25km(周辺を含む)と広大で、北緯37度58分34秒・東経82度43分15秒に位置する仏塔を中心に、寺院・住居・生産工房・墓地・果樹園・城壁など約220ヵ所の遺構と数10ヵ所の遺物散布地、さらには河床・大量の枯樹林などが残存している。海拔は 1200m 前後。沙漠に残存する世界最大の木造都市遺跡である。

周辺民の案内で到達し、「ニヤ遺跡」と命名したのは、ハンガリー生まれで後にイギリスに帰化したオーレル・スタイン、1901年1月のこと。06・13・31年にも調査をおこない、大量の文物を持ち出し、当時としては卓越した研究をおこない、詳細な報告書で発表した。大谷探検隊の橋瑞超も1909年に進入を試みたが、暑さのためか日程上か遺跡には到達していない。1959年には新疆博物館隊が調査を行い、遺跡北部で墓地を発掘した。これらの調査により二千年を経て今日まで住居の柱などがそのまま残存するタクラマカン沙漠で最大かつ重要な遺跡として注目を集め、一躍有名になったが、大沙漠の奥深くに位置するなどの理由から体系的に調査されることはなく、本格的調査が待たれていた。

ニヤ調査成果

1988年10月29日、日本隊3名が日本を出発し「日中共同ニヤ遺跡学術調査」(佛教大学内ニヤ遺跡学術研究機構・新疆文物局〈97年3月までは新疆文化庁文物処〉主催、文部科学省助成、中国国家文物局批准)が開始された⁽⁴⁾。以来順次、調査規模を拡充し、1997年までに9次にわたる現地調査を敢行し、シルクロード考古史に特筆されるほどの成果をあげた。

その一部を列記する。

- 仏塔・寺院・墓地・住居・生産工房・土壘・家畜小屋・果樹園・貯水池・並木・建築部材や遺物散布地など約250の遺構を発見し、GPSで経緯度を登録し、遺構分布図を作成した。
- 大型GPSを活用し、周辺地形図を作成、遺跡全容を明らかにした。
- 遺跡北方約40kmに更に古い遺構・遺物を発見し、生活拠点の南下を明らかにした。
- 関連都市の住居を測量調査し、遺跡住居構造を明らかにした。
- いくつかの住居を発掘し、生活状況を明らかにした。
- いくつかの住居群や生産工房を測量調査し、都市構造を明らかにした。
- 寺院を発掘調査し、壁画などを検出し、西域仏教解明の手がかりをえた。
- 王族の墓地を発見発掘し、国宝級遺物多数を検出し、精絶国が当時の中原王朝と政治経済文化面で密接な関係があったことを明らかにした。
- 各種の墓地を発掘し、埋葬方法に新しい知見をえた。
- 住居の柱材などをC14法により測定し、遺跡年代確定の大きな手がかりをえた。
- カローシュティール・漢文木簡をふくむ大量の貴重文物を検出し、新しい知見をえた。
- カローシュティール・漢文木簡を解読し、新しい知見をえた。
- いくつかの動物の化石を検出し、遺跡一帯の地質形成で新しい知見をえた。

これらの結果、西域36国のひとつ「精絶国」の全容を明らかにした。

ニヤ調査組織

筆者はニヤ調査の提唱者であり、推進者であるが、これらの成果は決して一人で成し遂げたわけではない。日中双方の多くの方々のご指導ご尽力のおかげである。心からの感謝を改めて表明したい。

中国共産党が絶対的権力をもつ中国では党・政府の支持をえることが不可欠であるので、名誉主席に鉄木ル・達瓦買提全国人民代表大会副委員長(前新疆政府主席)、名誉副主席に吾甫尔・阿不都拉新疆政府副主席、顧問に李羨林北京大学教授、王中俊新疆文化庁書記、買買提祖農・買買提艾力新疆文化庁長をいただき推進した。

日本側隊長は筆者(佛教大学内ニヤ遺跡学術研究機構代表)、学術隊長は井ノ口泰淳(龍谷大学名誉教授)、第二代学術隊長は田辺昭三(京都造形芸術大学教授)、学術副隊長は真田康道(佛教大学教授)が担当した。

中国側隊長は韓翔(新疆文化庁文物処長)、第二代隊長は岳峰(新疆文物局長)、学術隊長は王炳華(新疆文物考古研究所長)、第二代学術隊長は于志勇(新疆文物考古研究所副所長・後に所長をへて新疆博物館長)が担当した。

日本側隊員は佛教大学・龍谷大学・京都造形芸術大学・国立歴史民俗博物館・奈良国立文化財研究所・科学技術庁・早稲田大学・京都大学・国学院大学・関西大学・関西外国語大学・京都市埋蔵文化財研究所・大阪市文化財協会・長岡京市埋蔵文化財センター・橿原考古学研究所・古代オリエント博物館・六甲山麓遺跡調査会・山口大学・寺尾商会・ジェック・ツルカメコーポレーション(順不同)などから教授・准教授・講師・技師・院生・学生などの参加をえた。

中国側隊員は新疆政府・新疆文化庁・新疆文物局・新疆文物考古研究所・新疆博物館・和田地区文物管理所・国家文物局・北京大学・華東師範大学・中国科学院・中国社会科学院・中国文物研究所・吐魯番地区文物局(順不同)などから教授・准教授・研究員などの参加をえた⁽⁵⁾。

研究領域が多岐にわたり、一機関だけでは対応できないため多くの組織から参加をえた。専門分野は外事管理・文化財管理・国際協力・考古学・仏教学・西域文献学・東西交渉史・建築学・地理学・地質学・木質科学・仏教美術史・染織学・撮影・測量などである。時を経て旅立たれた方も多し。ご冥福を祈るばかりである。

ニヤ調査スローガン

日中双方は「友好・共同・安全・高質・節約」の五大精神を掲げて、実践してきた。友好と共同は説明を要しない。「安全」は無人の大沙漠での調査ならではである。他の隊では沙漠での調査で行方不明になった研究者もいる。日中共同隊でも進路不明による緊急ビバーク・病人発生・駱駝からの転落による骨折などを体験している。世界的文化遺産にふさわしい調査・研

究が必要であり「高質」を掲げ、調査は多額費用を要するため「節約」を掲げた。ただし潤滑油的役割を果たす飲食費は削らなかつた。

ニヤ調査中国政府許可

我が国と同様に中国でも文化財を調査するには関係機関の許可が必要である。中でも外国人による遺跡調査は「中華人民共和国考古涉外工作管理弁法」(通称：国家文物局令第1号・1990年12月31日国务院批准・1991年2月22日施行)などで厳しく管理されている。

日中共同ニヤ遺跡学術調査は上記法規施行前であったが、中国側と契約を交わし開始した。1988年7月19日、筆者と新疆文化庁文物処の韓翔処長がニヤ遺跡やダングンウイリク遺跡をふくむ西域南道の遺跡群調査に関する覚書を交わした⁽⁶⁾。この覚書により、同年10～11月第一次調査(予備調査)を敢行し、日中双方は本格調査の必要性を確認した。同年11月14日、筆者は新疆文化庁の买买提祖農・买买提艾力庁長と以降調査の覚書を交わした⁽⁷⁾。これらの覚書や以下の協議書の一部は前述『中国新疆36年国際協力実録』に収録している。

1990年10～11月第二次調査(予備調査)を実施した。同年11月11日、筆者と买买提祖農庁長が以降調査の覚書を交わした⁽⁸⁾。翌91年10月～11月第三次調査(予備調査)を実施、これら3次にわたる調査が評価され、1992年4月14日、国家文物局より正式許可を取得した⁽⁹⁾。これを受け、同月28日、筆者と买买提祖農庁長は新疆政府の克尤木・巴吾東副主席列席のもと、92・93年調査の協議書を交わした⁽¹⁰⁾。正式許可を受けて、1992年の第四次調査より本格調査へ移行した。

1994年1月29日、中国と外国との共同調査として最大規模のニヤ調査を全面的支持してきた国家文物局は張徳勤局長名で、前述のような実績を評価し、関係部門の批准をへて発掘許可を発出した⁽¹¹⁾。国家文物局令による外国隊への発掘許可第1号と聞かされた。

日中双方にとって待望の許可であり、李東輝新疆政府副主席列席のもと、同日、94～96年分の協議書に筆者と解耀華新疆文化庁書記(日本語版は韓翔処長)が調印した⁽¹²⁾。調査の本格化・長期化に対応すべく、日本側は同年4月、海部俊樹元首相・張徳勤国家文物局長を名誉会長、塩川正十郎衆議院議員らを顧問、水谷幸正学長(のちに中井真孝学長、福原隆善学長、安藤佳香教授へ順次交代)と筆者を代表として、佛教大学に「中国新疆ニヤ遺跡学術研究機構」(略称：佛教大学内ニヤ遺跡学術研究機構)を設立した。

1994年9月1日、筆者と王炳華新疆文物考古研究所長が94年度調査発掘詳細協議書に調印し、同年9月～11月の第六次調査より発掘を開始した。1995年8月18日、筆者と买买提祖農庁長が95年度調査発掘詳細協議書に調印し、同年9月～11月の第七次調査を実施し、王墓を発掘し「五星出東方利中国」「王侯合昏千秋萬歳宜子孫」錦など国宝級遺物多数を検出した⁽¹³⁾。

1996年8月20日、筆者と王中俊新疆文化庁書記が96年度調査発掘詳細協議書に調印、同年10月～11月第八次調査を実施した。翌97年3月22日、中国共産党新疆委員会の克尤木・巴吾東副

書記と新疆政府の米吉提・納斯尔副主席列席のもと、筆者と岳峰新疆文物局長は97年以降の詳細協議書に調印した。同年10月～11月第九次調査を実施した。1997年以降の協議書も調印済みであったが、国家文物局を交えての数度の打合せの結果、現地調査に一区切りつけ、研究や報告書出版などを継続することで日中双方は合意し、日本側は本年調査終了時に測量機器など全装備を中国側へ贈呈した。

ここまで読まれた方は「こんなに許可や契約が必要なのか、大変だ」と感じられたであろう。ひとつの覚書ひとつの協議書が一回で合意に達するだけでなく、数度の打合せや修正が必要である。並大抵の苦勞ではない。そのために、踏査や測量などで許可を取得しないまま実施されている例も見聞きする。中には邦人が拘束された事案も報道されている⁽¹⁴⁾。実名入り報道には「相手方中国人が許可を取っているものと思っていた」などとの釈明が掲載されているが、当人はもとより所属機関、さらには日本のイメージ悪化にもつながる。十分な注意が必要であろう。例えば所属機関は出張申請に契約書添付を条件とすべきであろう。筆者は上記事案で日中双方より依頼され、日本側責任者をともしない新疆を訪問し、新疆政府外事弁公室・新疆測量局への「お詫び」を仲介したこともある。

ニヤ調査文科省科研費助成

1992年より文部省(現文部科学省)の科学研究費助成が開始された。国際学術研究・研究代表者：真田康道佛教大学教授04041095(1992・93年度)、07041027・09041027(95・96・97年度)、09041035(98・99年度)でいただいた。また佛教大学補助や一般からの寄付もいただいた。ありがたいことである。

ニヤ調査報告書3巻

1996年5月(4月30日付)、日中双方は88～93年度調査の成果を、井ノ口泰淳龍谷大学名誉教授や真田康道佛教大学教授・岳峰新疆文物局長・王炳華新疆文物考古研究所長・于志勇新疆文物考古研究所副所長らの尽力をいただき、文部省科研費研究成果公開促進費(71005・申請者：井ノ口泰淳)をえて『日中/中日共同ニヤ遺跡学術調査報告書』第一巻(法蔵館)として刊行した。

A4版・目次等32頁・本文404頁・英文サマリー6頁・図版66頁、日中両文である。祝辞・序につづく第1章「遺跡の位置と調査の経緯」は遺跡の位置と環境・調査の契機と経過・調査組織・調査協力・助言者、第2章「調査成果」は調査概要・1988年調査・1990年調査・1991年調査・1993年ニヤ遺跡北方の調査・1991～93年分布調査の成果・1993年N2住居址群の測量調査・仏塔周辺の地形測量、第3章「自然科学的調査・分析」は1993年採集木材の樹種・N2住居址群の劣化状態・青銅・ガラス関連採集資料の科学分析結果、第4章「考察編」はニヤ調査の回顧と新しい成果・ニヤ遺跡N3住居址群の概況及び建物の構造・沙漠中の古代都市ニヤ遺

跡・西域南道と精絶国考・カラーシュティー文字資料と仏教・ニヤ遺跡出土のカラーシュティー文字資料の研究・ニヤ遺跡出土採集文物について・新疆シルクロード南道における民居住宅に関する研究、おわりにでは「日中双方の隊長として今後の調査について」、さらに本報告書の対象となった1988～93年調査以降の94～95年調査概要で構成されている。付図としてA2大の「ニヤ遺跡 N2 地点測量図」1/600が添付されている。

2000年1月(1999年10月30日付)、日中双方は97年度調査までの成果を、水谷幸正佛教大学長・田辺昭三京都造形大学教授・真田康道佛教大学教授・吉崎伸京都市埋蔵文化財研究所主任・岳峰新疆文物局長・于志勇新疆文物考古研究所副所長・孫躍新隊員・周培彦ニヤ機構研究員らの尽力をえて、『日中/中日共同ニヤ遺跡学術調査報告書』第二巻(中村印刷)として刊行した。

第一巻は一冊中に日文と中文をふくめたが、第二巻ではより読みやすくするために日文と中文を分冊し、別に図版をつけ、3冊セットとした。共にA4版である。日文版では、巻頭図版4頁・目次等22頁・本文398頁・英文サマリー14頁である。中文版では、巻頭図版4頁・目次等22頁・本文341頁・英文サマリー14頁である。本文頁が日文版より少ないのは、中訳では短くなるためである。図版は107頁である。

祝辞・序につづく第I部「調査報告編」の第1章「遺跡の位置・環境と調査の経緯」は遺跡の位置・気候と地理的環境・研究簡史・周辺の遺跡・調査にいたる経緯・1988年度から93年度までの調査・1994年度から97年度までの調査・調査組織、第2章「分布調査の成果」は分布調査の過程・調査の方法・94～97年度調査の遺跡概要・ニヤ遺跡周辺の地形図と遺跡実測図の作成・測量について・地形図の作成・基準点の設置・遺構の測量・北方調査概要・北方調査で発見した遺構と遺物・その年代分析、第3章「発掘・整理調査とその成果」は92B4(N2)の調査・93A35(N5)の調査・93A27(N37)の調査・93A10(N13)と93A9(N14)の調査・95MN1号墓の調査・南方城址の調査・仏塔、第4章「遺物の検討」はカラーシュティー木簡の解説・木製品と建築部材の検討・ミイラの研究、終章「1994・95・96・97年度調査の成果と課題」は各年の調査成果と課題・日中双方隊長として、で構成されている。

第II部「研究論文編」はニヤ遺跡に関する歴史地理的研究にはじまり、寺院・尺度・カラーシュティー・五星出東方利中国・鏡・銭貨・珊瑚・東西交流・木材試料の年代・関連住居などに関する18点の研究が収められている。附表として、A4・16頁の「ニヤ遺跡分布調査GPS測定値一覧表」、付図として、B1大のニヤ遺跡遺構分布図およびそれらのCD-Rが添付されている。

2007年10月(30日付)には日中双方は第二巻以降の研究成果を、浅岡俊夫六甲山麓遺跡調査会代表・安藤佳香佛教大学教授・田中清美大阪市文化財協会所長・吉崎伸京都市埋蔵文化財研究所主任・盛春寿新疆文物局長・于志勇新疆文物考古研究所副所長・孫躍新隊員・周培彦ニヤ機構研究員らの尽力をえて『日中/中日共同ニヤ遺跡学術調査報告書』第三巻(真陽社)をまとめ

文部科学省オープン・リサーチ・センター整備事業(平成15年度～19年度)関連刊行物として刊行した。

A4版・巻頭図版2頁・目次等16頁・本文344頁・英文サマリー8頁・図版41頁である。第一巻と第二巻は日中両文であったが、第三巻では中文版を中国側が後日出版することになり、日文のみである。

序につづく第Ⅰ部「調査・資料編」は調査概要・93MNⅢ号墓の1993・97年調査・同発掘概要・民豊文物館収蔵ニヤ遺跡文物・和田博物館収蔵ニヤ遺跡文物・ガラス製品の分析と研究、第Ⅱ部「研究論文編」は遺跡発掘記・93A36(N6)周辺の地表調査・93A9(N14)南方工房跡群・出土遺物に見られる「中インド風」・カラーシュティール文字資料・橘瑞超の西域南道踏査・重大発見・95MN1号墓M3とM8の被葬者身分・火鑽具・墓葬制度など19点の研究が収められている。ちなみに第一巻から三巻までの重量は計7kgにおよぶ。

ニヤ調査国際シンポジウム度々

日中双方は両国で度々シンポジウムを開催し、隊員のみならず関係研究者の参加をえて研究成果を公開した。主な開催のみ紹介する。1997年9月、佛教大学にて新図書館開館記念「日中共同ニヤ遺跡学術研究国際シンポジウム・出土文物展」(佛教大学・新疆文物局・佛大ニヤ機構主催)を開催し、海部俊樹名誉会長・張宝智中国大使館文化参事官・水谷幸正佛教大学長・高橋弘次・中井真孝・杉本憲司佛教大学各教授・买买提祖農新疆文化庁長・宋新潮国家文物局考古管理处处长(現副局長)・徐萃芳中国社会科学院研究員・孟凡人同研究員・林梅村北京大学教授・樋口康隆檀原考古学研究所長・赤松明彦九州大学教授ほか日中双方隊員の長澤和俊・田辺昭三・井上正・真田康道・伊東隆夫・孫躍新・蓮池利隆・岳峰・王炳華・沙比提・阿合買提・于志勇・張鉄男・筆者らが挨拶や発表を行い、2日間のべ約500人が参加し大きな成果をあげた⁽¹⁵⁾。

2000年3月、ウルムチの環球ホテルで「中日共同ニヤ遺跡学術調査シンポジウム・報告書(第二巻)発行事」(新疆文化庁・新疆政府外事弁公室・新疆文物局・佛大ニヤ機構・新疆文物考古研究所主催)を開催、买买提明・扎克爾新疆ウイグル自治区副主席・徐華田新疆文化庁書記・祖農・庫提魯克新疆文化庁長・尼相・依不拉音新疆政府外事弁公室主任・楊志軍国家文物局司長・趙豊中国絲綢博物館副館長・林梅村北京大学教授・周培彦ニヤ機構研究員ほか日中双方隊員の田辺昭三・真田康道・吉崎伸・伊東隆夫・孫躍新・井上正・切畑健・小野田豪介・市川良文・蓮池利隆・橘堂晃一・韓翔・岳峰・王炳華・伊弟利斯・阿不都熱蘇勒・于志勇・張玉忠・楊林・孟凡人・筆者や1959年にニヤ遺跡を調査した新疆博物館の李遇春・中国考古学界第一人者の俞偉超中国歴史博物館長ら日中双方約150人が参加し、2日間にわたり熱心な発表・討議が行われた⁽¹⁶⁾。

2007年11月、日中双方は「日中共同シルクロード学術研究国際シンポジウム」を佛教大学四

条センターで開催し、福原隆善佛教大学長・杉本憲司・八木透佛教大学両教授・片山章雄東海大学教授・艾尔肯・米吉提新疆文物局副局长・巫新華中国社会科学院考古研究所新疆隊隊長・榮新江北京大学教授・周培彦ニヤ機構研究員ほか日中隊員の安藤佳香・浅岡俊夫・孫躍新・張玉忠・于志勇・阮秋榮・筆者らが充実した挨拶・発表を行った⁽¹⁷⁾。

2009年11月、日中双方は北京大学で「漢唐西域考古—ニヤ・ダンダンウイリク国際シンポジウム」(主催：北京大学考古文博学院・新疆文物局・北京大学中古史研究中心・佛教大学・中国社会科学院考古研究所)を開催した。日本側からは、山極伸之佛教大学長・中原健二同文学部長・周培彦ニヤ機構研究員や隊員の安藤佳香・浅岡俊夫・吉崎伸・岡岩太郎・伊東隆夫・吉田恵二・孫躍新・田中清美・市川良文・富澤千砂子・筆者ら18人、中国側からは、吳志攀北京大学副書記・童明康国家文物局副局长・孫華北京大学考古文博学院副院長・白雲翔中国社会科学院考古研究所副所長・盛春寿新疆文物局長・林梅村・榮新江北京大学両教授・王子今・魏堅中国人民大学両教授・李希光清華大学副院長・巫新華中国社会科学院考古研究所新疆隊隊長・朱泓吉林大学教授・王衛東新疆文物考古研究所長・甘偉新疆文物局幹部ほか隊員の于志勇・張玉忠・張鉄男・李軍・鉄付徳など多領域の研究者が両日とも約100人参加し、2日間にわたり挨拶や発表・討議が活発に行われた⁽¹⁸⁾。

ニヤ調査文物展度々

発掘し研究保護した遺物の一部はNHKなど主催「シルクロード・絹と黄金の道」展で東京国立博物館・大阪歴史博物館、NHKなど主催「新シルクロード・幻の都楼蘭から永遠の都西安へ」展で、江戸東京博物館・兵庫県立美術館・岡山市デジタルミュージアム、さらには佛教大学図書館・新疆博物館・中国歴史博物館(現中国国家博物館)・上海博物館はじめ杭州・香港・台北、そしてイタリア・アメリカ・韓国などでの文物展へも出陳され、大きな反響をよんだ⁽¹⁹⁾。今後も各地各国で展示されるであろう。

ニヤ調査社会的評価

1995年2月、ニヤ調査は国家文物局・中国文物報により「1995年中国十大考古大発見」に選ばれた⁽²⁰⁾。1996年11月、ニヤ遺跡全体が国務院により「全国重点文物保護単位」に格上げ指定された⁽²¹⁾。2001年3月、ニヤ調査は国家文物局・『考古』雑誌社により「20世紀中国考古大発見100」に選ばれた⁽²²⁾。2002年1月にはニヤ調査隊検出「五星出東方利中国」錦が国家文物局により膨大な文物中の「出国展覽禁止文物」64点のひとつに指定された⁽²³⁾。いわば「国宝中の国宝」になったといえる。

2010年3月19日づけ国家文物局機関紙「中国文物報」は一頁特集をくみ、ニヤ・ダンダンウイリク両遺跡の調査保護研究事業を「中国外国間共同事業と学問交流の模範例」、「多領域学問で西域考古の合作研究と保護を行った」、「中国外国学者の共同努力の傑出事業」などと最大級

の評価で報道した⁽²⁴⁾。心血を注いできた一人として喜びにたえない。

ニヤ調査困難克服

日中双方の民族・歴史・体制・制度・文化・言語などの違いの乗り越えがまずあった。沙漠という無人地帯での大規模調査であり、食糧や調査機材などを沙漠車やラクダで運び込まねばならない。春は砂嵐、夏は40度超、冬は零下40度といった気候上調査時期が10～11月の一ヶ月ほどしか適しておらず、長年を必要とした。それでも一日の温度差は約40度。陽が昇るころ起き前夜の残りの羊丼やお粥を掻き込み、班ごとに徒歩やラクダで現場へ向かい、分布調査や測量・発掘・研究、炎天下で硬いナンとソーセージ・リングをわずかな水で流しこみ、一休みして夕方まで活動継続、夕食はまた羊丼か羊ラーメン、その後に打合せと実測・資料整理といった日々。狭いテントでの雑魚寝、シャワーもない約3週間…。満天の星をながめつつ、テントに入らず寝るといった“楽しい”こともあるが、強い使命感・強靱な精神力・体力、そして60人近い数民族による活動であり、協調力がないと耐えられない。

多領域の優れた英知の組織化は一大学では困難であり多くの大学・研究機関・専門企業からの参加をえた。その調整にも労力を要した。長年にわたる大規模調査や保護・研究・報告書・シンポジウムなどのために多額資金が必要であり、文部科学省助成や佛教大学補助もいただいたが、殆どは私財と借入金でやりくりした⁽²⁵⁾。

日中平和友好条約40周年

1978年8月12日、「日本国と中華人民共和国との間の平和友好条約」が締結された。1972年9月の「国交正常化共同声明」をベースとしたもので、主権及び領土保全の相互尊重、相互不可侵、内政相互不干渉、平等互惠と平和共存の上に恒久的な平和友好関係を発展させる、すべての紛争を平和的手段により解決し、武力又は武力による威嚇に訴えないことを確認するなどとしている⁽²⁶⁾。特筆すべきは前文に「両国政府及び両国民の間の友好関係が新しい基礎の上に大きな発展を遂げていることを満足の意をもって回顧し…」と正常化以来の関係を「満足」としている点である⁽²⁷⁾。

しかし、両国関係は紆余曲折を繰り返してきた。最近では2010年9月、沖縄県尖閣諸島付近で海上保安庁の巡視船2隻に中国漁船が衝突。11月、保安官により動画がYouTubeにリークされ、対中感情は悪化した。2012年9月、野田佳彦首相の決定により日本政府による尖閣諸島国有化とそれに反発する中国各地での激しい反日デモで両国関係は一気に冷え込んだ。

両国政府は水面下の折衝をへて2014年11月7日未明、北京の釣魚台国賓館で安倍晋三首相の側近である谷内正太郎国家安全保障局長と楊潔篪國務委員が2年余にわたり緊張状態が続いている日中関係を打開すべく「双方認識4項目」文書にサインした⁽²⁸⁾。筆者は同日、同じ国賓館で第11回「北京フォーラム」開会式に参加していたが、そのような交渉が行われたと知った

のは同夜の中国中央テレビによってであった。同月10日、安倍首相と習近平国家主席は北京で短時間ながら会談した。笑顔の首相と厳しい表情の主席であった。以来、両首脳は度々会見した。

これら両国政府の努力により改善が順次進み、2018年5月8日、李克強首相が訪日した。中国の首相としては7年ぶりである。翌9日、安倍晋三首相との会談が行われた。10日には経団連などの主催により「日中平和友好条約締結40周年記念・李克強総理歓迎レセプション」が東京で開催された⁽²⁹⁾。筆者も1300人(主催者発表)の一人として、出席した。

安倍首相は「競争から協調へ。政治家だけでなく民間の方々の努力で次の40年に向けて協調してゆこう。次の中国訪問には皆さんにも同行いただきたい。交流して実際の姿を見ることが大切。中国人から安倍は怖いと思われているようだが、会うと優しい人と言われる(笑)」などと挨拶し参加者一同が乾杯した。

李首相は「参加者の多くが同時翻訳機なしでスピーチを聞いている(笑)。昨日は突っ込んだ具体的話し合いをし、沢山の調印をした。両国の指導者が定期的に往来することは関係発展に良い環境を作り出す。将来を見据え勇気と知恵で中日関係を発展させることが出来る」などと挨拶し参加者一同が乾杯した。

前日の両首脳会談が順調だったこともあり、両者のスピーチも笑いを誘うほど和やかなものであった。筆者はスピーチを聴きながら、その背景の日中両国の国旗がニヤ遺跡調査時に砂丘に掲げた両国旗と重なった。そして、我々日中隊が発掘した「五星出東方利中国」錦が浮かんできた。

2018年10月25～27日、安倍晋三首相は日本の首相として7年ぶりに中国を公式訪問し、習近平国家主席・李克強首相と会談した。双方は経済分野などで、両国関係を「競争から協調へ」と新たな段階に発展させることで一致した。5月の安倍首相のスピーチどおり、約500人の経済人が同行し、日中の政府系機関や民間企業がアジアなど新興国でインフラ投資などを共同展開する52件の協議書に調印した⁽³⁰⁾。「一帯一路」協力の新たな一歩となった。

中国改革開放政策40周年

1978年10月23日、福田赳夫首相と鄧小平副総理が出席して「日中平和友好条約」批准書交換式が東京で行われた。鄧副総理は松下電器(現パナソニック)テレビ事業部を視察し、「中国の近代化を手伝って欲しい」と松下幸之助同社相談役に要請、松下相談役は「協力させていただく」と快諾し、翌年には北京にブラウン管製造合弁会社を設立、これをきっかけに日本企業の中国進出が本格化した。また鄧副総理が一連の視察で実見した日本の躍進ぶりが後の改革開放政策の動機となったとされている。中国共産党機関紙「人民日報」Web「人民网」日本語版より「1978年日本の旅－鄧小平氏が訪日で学んだもの」の一部を引用する⁽³¹⁾。

1978年は中国の国家戦略に大きな転換が起こった年だ。鄧小平氏が中国の指導者としては戦後初となる正式訪日を行った。この訪問は「中日平和友好条約」の批准書交換セレモニーに出席するためのものだったが、鄧氏にとっては中国近代化の大戦略を準備するための学習の旅でもあった。この旅の中で、中国の改革開放の総設計者である鄧氏は、改革開放の壮大な青写真を心に描き、中国をいかに発展させていくかを考えていた。

「我々は今世紀末までの近代化実現を掲げている。そこでいう近代化とは、その頃の世界の水準に迫った近代化を指す。今回日本を訪れたのも、日本に教えを請うためだ。我々は全ての先進国に教えを請う」

新幹線で東京から関西に向かう途中、感想を聞かれた鄧氏は「速い。とても速い。後ろからムチで打っているような速さだ。これこそ我々が求めている速さだ。今回の訪日で近代化とは何かがわかった」と語った。

鄧小平氏の訪日後、中国には「日本ブーム」が沸き起こった。多くの視察団が日本に赴き、多くの日本人の専門家や研究者が中国に招かれた。中日政府のメンバーによる会議も相次いで行われた。官民の各分野・各レベルの交流は日増しに活発となり、経済・貿易・技術での両国の協力は急速に発展した。

同年12月18日、中国共産党第11期中央委員会第3回全体会議で毛沢東時代の「階級闘争」に終止符を打ち、「経済建設」へ転換することを決定した。呼応して日本から ODA 提供が開始された。中国共産主義青年団の機関紙「中国青年報」も「日本がなかったら改革開放は違ったものに」と報じたほどである⁽³²⁾。

以来、中国は発展をつづけ、2010年には GDP で日本を抜き、世界第二の経済大国となった。安倍首相は前述の会見で日本からの ODA は2018年度の新規案件で終了すると伝え、習主席はその貢献を評価する意向を示した⁽³³⁾。

急発展つづけてきた中国経済も鈍化の兆しが現れ始めている。あらゆる分野で超大国を目指す中国は、今後も改革開放政策を継続し、アメリカを追い抜く日もありうるであろう。中国とアメリカの対立と協調が注目される。

筆者は2018年5月、「人民网」から「改革開放40周年」特集として取材を受けた。事前に日本語で質問書が届いた。6項目中の本論に関係する部分は次のようである。①ニヤ遺跡調査研究は先生が成しえた最大の成果のひとつですが、調査開始前に必ず大きな成果が得られると確信があったか。先生が主導した調査でどんな発見が最も価値あるとお考えか。どのような困難を克服してきたのか。②今年是中国の改革開放40周年に当たる。自身の経験から中国の改革開放についてどのように考えているか。これらに対して、本論に記したように答えた。取材の一環でショートビデオも撮影された。記事も1分動画も日本語と中国語で Web 発信されている。

11月には「人民日報」から「改革開放40周年」への中国語での書面取材を受けた。上記と異

なる質問(拙訳)は次のようである。中国側の狙いを理解いただくために紹介する。①40年の変化を体験した実例で答えて欲しい。②改革開放の巨大な成功のカギは何であったと思うか。③その過程で外国から得たものは何かあったか。④その過程で共産党が果たした役割は何だと思うか。⑤改革開放は世界にどのような貢献をしたか。⑥「一带一路」と人類運命共同体提唱をどう考えるか。取材はやがて掲載されるであろう。

冒頭の新疆博物館ニヤ調査30周年展開幕式の写真、ロビー上部のスローガン「習近平新時代の中国の特色ある社会主義思想の導きの下、中華民族の偉大な復興・中国の夢の新疆の一頁に奮闘しよう」(拙訳)が改革開放40年の一面を示している。

習近平国家主席は11月13日、国家博物館での「偉大な変革－改革開放40周年慶祝40周年大展覽」を視察し、「統一思想を凝縮し闘志団結奮闘を鼓舞し、全国各族人民は中国の特色ある社会主義による改革開放路線を信じ党と進もう」(拙訳)と強調した⁽³⁴⁾。

ニヤ調査と日中平和友好条約40周年・中国改革開放政策40周年

ニヤ調査を歴史的に総括すれば、第一段階は20世紀初頭の外国人スタインによる発見と文物持ち出しであり、第二段階は新疆ウイグル自治区成立直後の新疆博物館隊による食料もままならないなかでの決死の調査であり、第三段階が改革開放時代の日中共同隊による大規模調査である。日中共同調査は期間も規模も最大であり、顕著な成果を獲得した。しかも研究や報告書刊行・文物展開催などが今も続いている。

日中共同ニヤ遺跡学術調査が可能となったのは、当然ながら両国に国交が樹立されていたからであり、日中平和友好条約が発効していたからである。その第三条に「両締約国は、善隣友好の精神に基づき、かつ、平等及び互惠並びに内政に対する相互不干渉の原則に従い、両国間の経済関係及び文化関係の一層の発展並びに両国民の交流の促進のために努力する」と定められている⁽³⁵⁾。この「文化関係の一層の発展」がニヤ調査を可能とした。

さらには「改革開放政策導入」がニヤ調査を可能にした背景にある。改革開放は経済面から着手された。1980年から沿海部の広東省・福建省・海南省の5都市に経済特区が設置され、84年にはさらに上海・大連・天津など14都市を対外開放した。

しかし、ニヤ調査の許可取得は容易ではなかった。当時、新疆の各都市は対外開放されていなかった。ニヤ遺跡が行政区的に属するミンフウン(民豊)も未開放であった。しかもタクラマカン沙漠の奥深くに所在している。

前述したように1988年7月、筆者は韓翔新疆文化庁文物処長とニヤ遺跡などの西域南道の遺跡群調査に関する覚書を交わしたが、「新疆側は国内の関係許可手続きを進め、許可手続き完了後に双方は更に打ち合わせを行う」(拙訳)との一項があり、新疆文化庁あげての上部機関や人民解放軍への説得がおこなわれた⁽³⁶⁾。1986年より開始したキジル千仏洞修復保存協力の実績と同協力を許可した新疆の最高指導者である王恩茂中国人民政治協商会議副主席(前中国共



ニヤ遺跡92A11(2015年撮影：筆者)



ニヤ調査1995年隊(部分・調査隊撮影)

産党新疆委員会書記)の支持によりニヤ調査は「参観」名目で許可を取得した。

世界最大の木造都市遺跡ニヤ遺跡を世界遺産に

2006年8月、中国国家文物局と世界遺産センターは、トルファンで「シルクロード」申請予備会議を開催。中国のほかにカザフスタン・キルギス・タジキスタン・ウズベキスタンなども参加し、行動計画を決議し、国をまたぐ共同申請活動が開始された⁽³⁷⁾。

2007年12月、国家文物局が6省区48カ所の申請を決定。新疆ではキジル千仏洞・ニヤ遺跡をはじめとして、楼蘭遺跡・交河故城・高昌故城・アスターナ墓地・スバシ故城・クムトラ千仏洞・シムセム千仏洞・ベゼクリク千仏洞など12遺跡、2012年登録を目指した⁽³⁸⁾。

2011年12月、タジキスタン・ウズベキスタン側の準備遅れで申請延期と分離申請を決定。規模も縮小、天山山脈周辺に絞られ、ニヤ遺跡や楼蘭などは次段階へ繰り越された⁽³⁹⁾。

2014年6月、カタールのドーハで開催された第38回世界遺産会議で「シルクロード：長安－天山回廊の交易路網」が世界文化遺産に登録された⁽⁴⁰⁾。構成資産33遺跡中、新疆ではキジル千仏洞など6遺跡である。筆者が「人類共通の文化遺産を後世へ」を掲げて、キジル千仏洞修復保存協力を開始して28年後のことで、会議のパソコン生中継を見続けていた筆者は思わず「万歳」と叫んだ。

ニヤ遺跡は世界最大の木造都市遺跡であり、「西域36国」中残存する最大の遺跡であり、世界的文化遺産である。古代シルクロード各分野研究に欠かせない重要遺跡である。さらには中国が注力する「一带一路」の古代シルクロード歴史交流実例遺跡でもある。世界遺産追加申請の前段階として、中国政府により主要遺構への保護柵設置や遺跡巡視小屋拡充などが進められている⁽⁴¹⁾。やがて「世界文化遺産」に登録されるであろう。

「日中共同ニヤ遺跡学術調査」には日中双方多くの方々の膨大な熱意・時間・英知・資金が投入され、シルクロード考古史と日中間国際協力に特筆されるほどの成果をあげた。感謝しきれない。筆者は今後も世界的文化遺産保護研究事業に微力を捧げ、灰はタクラマカン沙漠へ撒く。

※文中、敬称略。本稿は2018年11月30日時点の記述である。

追記：

2019年1月13日、中国中央テレビ日曜夜ゴールデンタイムの大型人気番組「国家宝蔵」が筆者ら日中隊1995年10月発掘の「五星出東方利中国」錦肘当を大々的に放映し評判を呼んだ。于志勇新疆博物館長(ニヤ調査中国側第二代学術隊長)も登場し「日本との共同調査」などと紹介し、日中隊員集合写真も映し出された。

キーワード：ニヤ調査30周年、日中平和友好条約40周年、中国改革開放40周年

〈注〉

(1) 中国国営新華社 Web「新華網」は「新疆旅游發展委員会によれば、2018年1月から8月迄で新疆への国内外観光客1億594万2900人、前年同期比40.93%増」(拙訳)と報じている。

baijiahao.baidu.com/s?id=1612046341964983458&wfr=spider&for=pc

(2) 中国検索サイト「百度」で2018.10.26に「尼雅考古30周年」と検索した際、表示された。

(3) 「国家文物局」www.sach.gov.cn/art/2018/9/25/art_723_151870.html

「歪心網」www.iyaxin.com/content/201809/25/c269872.html

(4) 「日中共同ニヤ遺跡学術調査」の日本側主催団体「佛教大学内ニヤ遺跡学術研究機構」の結成は1994年4月であるが、それ以前も佛教大学サイドの主催・交渉・契約によるものである。他大学が日中共同で調査と発表などとの報道もあるが、勘違いと思われる。本文に記したように多くの研究機関から参加をえて実施してきた。

(5) 隊員名簿は『日中／中日共同ニヤ遺跡学術調査報告書』(第一巻)などに記載している。

(6) 覚書は小島康誉編著『中国新疆36年国際協力実録』p.59 収録

- (7) 覚書は前掲(6)p.63 収録
- (8) 覚書は前掲(6)p.64 収録
- (9) 許可書は前掲(6)p.66 収録
- (10) 協議書は前掲(6)p.66 収録
- (11) 発掘許可書は前掲(6)p.77 収録
- (12) 協議書は前掲(6)p.78 収録
- (13) この発見は「新疆日報」(1995.12.22)・「毎日新聞」(1995.12.23)・「日本経済新聞」(1995.12.23)・「人民日報」(1995.12.25)などで大きく報じられた。
- (14) この無許可測量による拘束事案は「新疆日報」(2007.4.28)・「読売新聞」(2007.5.10)・「京都新聞」(2007.5.10)などで報じられた。「新疆日報」記事は前掲(6)p.231 に収録している。
- (15) 『日中共同ニヤ遺跡学術研究国際シンポジウム発表要旨』(同シンポジウム開催実行委員会1997)・「京都新聞」1997.9.18
- (16) 『中日尼雅遺址ニヤ遺跡学術研究会発言提要』(新疆文物考古研究所2000)・「新疆日報」2000.3.21・「人民日報」2000.3.23・「中国文物報」2000.4.9ほか
- (17) 『日中共同シルクロード学術研究国際シンポジウム』(佛教大学アジア宗教文化情報研究所・佛教大学内ニヤ遺跡学術研究機構2007)
- (18) 『漢唐西域考古：尼雅－丹丹烏里克国際学術研究会会議論文提要』(新疆文物考古研究所2009)・『漢唐西域考古－ニヤ・丹丹ウイリク国際シンポジウム発表要旨要約資料集』(佛教大学宗教文化ミュージアム・佛教大学内ニヤ遺跡学術研究機構2010)・「中国文物報」2009.11.25・2010.3.19・「新疆日報」2009.12.9ほか
- (19) 『日中共同ニヤ遺跡出土文物展』(佛教大学1997)・『鑑賞家・新疆文物考古成就特輯』(上海訳文出版社1998)・『絲綢之路沙漠王子遺宝展』(中国絲綢博物館2000)・『シルクロード・絹と黄金の道』(NHK ほか2002)・『新シルクロード展・幻の都楼蘭から永遠の都西安へ』(NHK ほか2005)・「京都新聞」1997.9.10・「毎日新聞」1997.9.12・「産経新聞」1997.9.17・「読売新聞」1997.9.23ほか
- (20) 「中国文物報」1996.2.18
- (21) 「中国文物報」1996.12.29
- (22) 「中国文物報」2001.4.4
- (23) 「中国文物報」2002.1.30
- (24) 報道は前掲(6)p.120 収録
- (25) 佛教大学内ニヤ遺跡学術研究機構の「1996年度収支決算書」は前掲(6)p.253 に収録している。当年度の支出計は5200万円余である。
- (26) 日本外務省 www.mofa.go.jp/mofaj/area/china/nc_heiwa.html
- (27) 同上
- (28) 日本外務省 www.mofa.go.jp/mofaj/a_o/c_ml/cn/page4_000789.html
- (29) 「読売新聞」「朝日新聞」ほか2018.5.11
- (30) 「毎日新聞」「日本経済新聞」2018.10.27
- (31) 「人民网」日本語版 j.people.com.cn/95911/95954/6545780.html
- (32) 「人民网」日本語版 j.people.com.cn/94474/6561159.html
- (33) 「読売新聞」2018.10.27
- (34) 中国共産党新聞 <http://cpc.people.com.cn/n1/2018/1113/c64094-30398746.html>

- (35) 日本外務省 www.mofa.go.jp/mofaj/area/china/nc_heiwa.html
- (36) 前掲(6)p.59 収録
- (37) 新疆文物局 www.xjww.com.cn/news/show-8241.aspx
- (38) 新疆文物局 www.xjww.com.cn/news/show-8238.aspx
- (39) 行知部落 www.xzbu.com/7/view-6086583.htm
- (40) 「読売新聞」「朝日新聞」「毎日新聞」ほか2014.6.23
- (41) 2015年筆者は遺跡保護強化に対応して広大な遺跡巡視用に小型沙漠車 POLARIS を寄贈した。前掲(6)p.123 に写真収録。また新疆文物局と人材育成を目的として設立している「小島新疆文化文物事業優秀賞」をニヤ遺跡保護巡視員2名(2000・2017年)にも授与し、荣誉と賞金を通じて応援している。前掲(6)p.237 に写真収録。

〈主な参考文献〉

- 日中共同ニヤ遺跡学術調査隊『日中／中日共同ニヤ遺跡学術調査報告書』(第一卷)法蔵館1996
- 日中共同ニヤ遺跡学術調査隊『日中／中日共同ニヤ遺跡学術調査報告書』(第二卷)中村印刷2000
- 日中共同ニヤ遺跡学術調査隊『日中／中日共同ニヤ遺跡学術調査報告書』(第三卷)真陽社2007
- 小島康誉『新疆での世界的文化遺産保護研究事業と国際協力の意義』佛教大学宗教文化ミュージアム
2013
- 小島康誉編著『中国新疆36年国際協力実録』東方出版2018